



Title	「西語らしさ」の音形的側面について
Author(s)	出口, 厚実
Citation	Estudios Hispánicos. 1972, 2, p. 34-49
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/93566
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

「西語らしさ」の音形的側面について

出 口 厚 実

0) ‘西語を話す’とか‘西語を知っている’という 場合に含まれる内容の一つとして、何が西語の単語で、何がそうでないかを区別する能力がある。西語を母国語として話す人々はある音、又は音の連続が西語の単語か否か即座に判断できる筈である。例えば誰でも〔kása〕を西語に属す単語として正しく聴き取り、〔xpet〕を訳のわからぬデタラメな音、あるいは聞きなれぬ外国語らしい語と感じる。しかし〔káRa〕(carra) が西語か否か尋ねれば人により答えは変わるかもしれない。「西語の単語」という言い方では曖昧であるからである。もし単語の外形、つまりその音声形態が西語とみなされ得るものをすべてそのように呼ぶならば carra は西語だと判断される。しかし内容、即ちその音声形態と意味との特定の結びつきが西語に存在するか否かが問われていると解するならば答は no, であろう。また〔karnét〕の場合は逆に西語らしい響きではないが、一応西語として意味をなす語と考えられるであろう。従って西語を話す人々は、単に西語か否かを判断するというより、次の4つのグループを見分けることが出来ると言い改めるべきであろう。

		A	B	C	D
西語性	外形 (音声形態)	+	+	—	—
	内容 (意味)	+	—	+	—

例 〔kása〕 〔káRa〕 〔karnét〕 〔xpet〕

音声が西語としての内容をもつか否か、意味を成すかどうかの基準は、使用語彙範囲の大小からして各人によって異なり得る。一方、辞書に実在するかどうか、また現在その語が一般に使用されているかに確信がなくても、“西語の単語”を‘西語らしい響きを持つ’あるいは‘西語の単語としてありそうな音声’と解釈して音声形態だけを判断の基準とすれば、誰が答えてもほぼ同じ結果が得られるものと思われる。この客観性は分布の比例的対立関係に裏付けられている。例えば、kása, káma, káθa, kara……… ; báRa,

máRa, páRa, gáRa……などの語の存在が, káRáは‘偶然の穴’であることを証明する。さらに ksa:z, spok などはDのグループに属し, 現実に西語にないだけでなく誰もこれらを西語的な音声だと感じない。Dの中には例えば, [káza] のように, 非西語的ではあるが[xpet] に比べれば, いくらか西語に近いと直観的に認められるものもある。音声形態上の不許容性には, かなりの程度差があるように見える。内容(意味)の面からどこまでが西語に入るべきかについての絶対的基準はあり得ない。だから, ある語を西語とみるかどうかに迷い, 判断不能が生じるとすれば, この基準の不確定性のためである。

そこで本稿は音的側面から見た西語性の条件を明らかにし, 西語語彙の音組成に対する法則を形式的に表わそうと試みる。ある音声形態が西語として許容されるか, 逸脱した非西語音形とみなされるかを決定する仕組みを検討するには生成音韻論の枠組が適していると思われる。2 値的弁別素性の行列を表記単位の基盤として利用すれば, 音組織における規則性は同時に辞書表示での音声情報の余剰になり, これが辞書の簡略化にも役立つ。西語辞書中の全項目は上述のような西語としての条件(規則性)を共通の特徴として持つのであるから, それらを一般的な音形余剰規則(=形態素構造規則)として別に与えればよい。そうすれば各項目の発音に関する情報から, この分だけを剰余として省略することができる。

以下, 主にChomsky—Halleの Sound Pattern of English = *SPE*, (1968) に用いられた枠組に基づいて, segment 内の余剰性及び lexical redundancy rule¹⁾ を拡張した“語レベル”での西語に対する音形上の拘束を検討したい。対象となるのはスペイン Castilla 地方の方言である。なお本稿では韻律素性の問題を考慮外においたので, 強勢配分etc. に関連した種々の音形上の制限は扱わないことにする。

1) 今, 仮に西語の音形 segment のすべてが起りうる, 辞書項目に対する一定の位置的条件があるとする。そこに出現し区別される segment を互に異ならしめるに必要な音形素性の種類とその指定値は *SPE* の調音的名称を利用した音声素性²⁾ で表わされれば〔表 I〕のようになると考えられる³⁾。〔表 I〕は音形表示での各 segment の姿そのものではない。ここで用いられている音形素性は12であるが, これは西語辞書上の表示に十分な数であり, 言及されない他の素性がすべてこの12の素性指定から余剰的に

〔表 I〕

	o	a	e	u	i	y	ɤ	ɪ	r	R	m	b	f	p	θ	t	d	n	ɲ	s	ʃ	k	g	x
vocalic	+	+	+	+	+	—	+	+	+	+	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
consonantal	—	—	—	—	—	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+
high	—	—	—	+	+	+	+	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	+	+	+	+
back	+	+	—	+	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	+	+	+
low	—	+	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
anterior	—	—	—	—	—	—	—	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	—	+	—	—	—	—
coronal	—	—	—	—	—	—	—	+	+	+	—	—	—	—	+	+	+	+	—	—	—	—	—	—
voice	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	—	—	—	—	+	+	+	—	—	—	+	—
nasal	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	+	—	—	—	—	—	—	+	+	—	—	—	—	—
continuant	+	+	+	+	+	+	+	+	—	—	—	—	+	—	+	—	—	—	—	+	—	—	—	+
tense	+	+	+	+	+	—	—	—	—	+	—	—	+	+	+	+	—	—	—	+	+	+	—	+
strident	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	+	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	+

導入され指定を受けて音形表示となる。言い換えれば、辞書項目のどんな環境においてもそれらの素性に関しては情報を与える必要がなく、実際十でも一でもなく0に指定される。例えば、西語の segment は常に〔0 round〕であるが、これは余剰規則によって〔+back, —low〕の母音に自動的に十の、他には一の指定を与えるからである。

前表には24種の segment を挙げたが、これらは Natural Categorical Segment⁴⁾ として実際に起りうる12素性の指定値の組合せの1部分で、他の segment は音形規則により24 segment から導き出される。表面的にその数が西語音素の種類とほぼ一致するとは云え、この表は音素の弁別的特徴構成を図示しているのではないことは明らかであろう。むしろ文法のあるレベルで一定条件の下で出現する可能性のある音形素性の組み合わせのうち、それより高次のレベルを抽象するのに必要となる代表的な、基本的なものを選定し、それを便宜上等価的な Alphabet なり音声記号に関係づける換算表である。

2) 辞書項目の音形行列では〔表I〕の12全素性の完全な指定が必要条件なのではない。第一に、単一 segment 内部の余剰性を考慮に入れば、これら24単位を区別するには1 segment に12よりはるかに少ない素性の指定で足りる。音形余剰規則は残る無指定素性にどのようにしてしかるべき指定を与えるのだろうか。まず、余剰性そのものと、余剰性を不完全指定行列に補填する形式的な手順とを区別して考えなければならない。例えば西語において segment “a” であることを述べるのに最少限度必要な特徴は〔+low〕だと言える。〔+low〕を持つ segment は他にないから、〔+low〕は“a”のみを特徴づける素性となる。尤もこれが成立するのは“a”以外の全部の segment が弁別的に異なっている時⁵⁾、言い換えれば、〔—low〕を指定されている時である。音形部門への input の段階では音形素性が完全に指定されているので、従って音形論の諸規則中で“a”を〔+low〕だけで十分に表わし得、他の素性は無指定のままで良い。このような場合、すべての余剰性を取り除き素性指定を究極的に必要な最小限に減らすことが出来る。

未指定音形行列を完全に指定された行列に変える場合はどうだろうか。辞書表示で“a”を〔+low〕で表わし余剰規則〔+low〕→〔+voc, —cons, ……〕が残る11の素性指定を導入すると仮定すれば、辞書に現われるすべての“a”に関して11の素性表示が節約される。しかしこのためには他の23 segments すべてが予め〔—low〕と指定を受けていなければならない。上記

規則よりも先に順位づけられた別の余剰規則で素性 low に関して a 以外の全 segment を指定するいくつかの規則を設定することは不可能ではない。ところが余剰的な素性を指定するのに、例えば素性 low よりも consonantal が先に決定されなければならないというような根拠を十分に説明することができない。即ち適用前にあらゆる segment の A が指定されていなければならない A → B / X — Y 型の音形規則が余剰性を次々に付加していくという考え方は不適当なのではないかと思われる。むしろ音形余剰性は各 segment を構成する素性の結合の仕方に対する同時的な条件と見られる⁹⁾。

〔表 I〕から分かるように low が + であれば、high と back はそれぞれ —, + の指定を受けている。〔—high, +back〕ならば、cons は必ず — であり、〔—cons〕ならば〔+voc〕……etc. が条件として存在する。このような条件をすべて明らかにして、あらゆる不完全な指定を受けた segment は自動的にこれらの条件に合致するすべての素性指定を与えられるという Convention (規約) を設けることにすれば、必ずしも規則の形を取らなくても良い。この方式に従うと、〔+segment〕以外については全く未指定の西語の基底音形 segment は〔表 I〕の通りの素性構成をもつ 24 種の segments を包括的に同時に表わすことになる。つまり 12 素性の + — の組合せで論理的に可能な種類の segment が機械的に与えられており、西語の余剰性条件はそこから上記の 24 のみを通過させる フィルターとしての機能を果たすわけである。具体的な例で母音の high, back, low の 3 素性のみを考えてみよう。〔表 I〕の西語 5 母音が受けている指定から、次の条件が満たされねばならない。 α high, β back, γ low と表わすと、 $\alpha = +$ ならば $\gamma = -$; $\beta = -$ ならば $\gamma = -$; $\gamma = +$ ならば $\alpha = -$ で且つ $\beta = +$ 。これら 3 条件は理論上ありうる 8 種類の組み合わせから〔+high, +back, +low〕, 〔+high, —back, +low〕, 〔—high, —back, +low〕を除去して〔表 I〕の o, a, e, i, u に示される 5 通りの指定を行う。だから辞書表示では a については〔+low〕のみを指定しておけば十分で、〔—high, +back〕であることは自動的にわかる。

3) 一般に、context から生じる余剰性を考慮に入れないならば、西語各辞書項目における行列の各 segment は〔表 I〕の通り指定された、一つを除いてすべての segment と弁別的に異なっているように指定を与えるだけで十分である。〔表 I〕の各 segment から余剰的な素性を除き、辞書で表示

されるのに必要な素性の指定のみを記せば〔表Ⅱ〕になる。

〔表Ⅱ〕の空所を充填するのが上述のような同時的な条件としての音形余剰規則である。即ちこれらの規則は、同時に、西語 segment として起りうる素性複合の範囲を規定しており、形態素構造規則 Morpheme Structure Rule の一部をなす。ここで特定規則が適用されるという意味は前述の convention で与えられる音形行列のうち、規則によって導入される素性指定に合致しない素性指定を含む行列は全部排除されるということである。従って西語の segment だけが選ばれる為には次の〔Ⅲ〕の規則がすべて適用されなければならない。なお $A \rightarrow B/X-Y$ において環境 $X-Y$ (ゼロの時を含めて) で包含関係 $A \subset B$ を意味しており、各規則(条件)は順序づけられていない。

4) 現実にはほとんど存在しないが辞書項目が、単一 segment である場合、又は辞書項目を構成する segment の結合様式と共起性に一切の制限がないならば、即ち24単位の間で理論的に可能なすべての結びつき方が許されているとするならば、西語 Lexicon で音形行列の列は〔表Ⅱ〕の24種のうちどれかの素性指定を持たねばならないだろう。しかし実際の segment はその隣接関係によって何らかの制限を受けているため、特定の環境に立ち得る segment の種類は24よりは少なく、通常 natural class を形成する限定された数の segment である。従ってそれらが共通する素性指定は一般的規則で予測されるものであり、辞書では未指定のままでよい。

この種の一般規則が西語 segment の許容される結合様式の範囲を規定して、〔Ⅲ〕の諸規則と共に形態素構造規則を構成する。しかしこれらの規則のとらえ方は辞書項目の形態、いわゆる基底形 underlying form を個々の項目に対しどのように設定するかによってかなり異なってくる。実際、西語の各語彙が辞書でどんな形態を取るべきかについてはまだまだ問題が多く残っているように思われる。従ってここでは、形態素構造規則(音形余剰規則)として実際に文法に含まれるべきかどうかは別として、西語の単語としての音声形態の条件、つまり語レベルでの西語性の条件を中心に探りたい。もっとも、そのうちの大部分は形態素構造規則でもあることは間違いない。ただ〔Ⅲ〕が列の context に関係なく適用されるのに反し、特定の環境にのみ有効である点で異なるが同時的な条件としての性質は変わらない。

〔表Ⅱ〕

	o	a	e	u	i	y	ɤ	ɪ	ɾ	ʀ	m	b	f	p	θ	t	d	n	ɲ	s	ʃ	k	g	x
vocalic						—	+	+	+	+							—						—	
consonantal	—		—	—	—																			
high	—		—	—	—																			
back	+		—	+	—	—																+	+	+
low	—	+																						
anterior								—			+	+	+	+		+	+	+		+	—			
coronal									+															
voice						+						+			—	—	—	—			—	—	—	—
nasal						—					+	—					—	+	+					
continuant										+					+	—								+
tense										—														
strident										+			+							+				

〔Ⅲ〕

1. $〔+nas〕 \rightarrow \begin{bmatrix} -voc \\ +voice \\ -back \\ -cont \end{bmatrix}$
2. $\begin{bmatrix} +voc \\ -cont \end{bmatrix} \rightarrow 〔+cor〕$
3. $\begin{bmatrix} +voice \\ +cor \end{bmatrix} \rightarrow 〔+ant〕$
4. $\begin{bmatrix} +voice \\ +cont \\ -strid \end{bmatrix} \rightarrow \begin{bmatrix} +cor \\ +ant \end{bmatrix}$
5. $\begin{bmatrix} +ant \\ +strid \end{bmatrix} \rightarrow 〔+cont〕$
6. $\begin{bmatrix} -ant \\ +cor \end{bmatrix} \rightarrow \begin{bmatrix} -back \\ -cont \\ +strid \end{bmatrix}$
7. $〔+back〕 \rightarrow \begin{bmatrix} -ant \\ -cor \\ -nas \end{bmatrix}$
8. $〔+ant〕 \rightarrow \begin{bmatrix} +cons \\ -back \end{bmatrix}$
9. $\begin{bmatrix} +voc \\ +cons \\ +cont \end{bmatrix} \rightarrow \begin{bmatrix} -back \\ -tense \end{bmatrix}$
10. $〔+low〕 \rightarrow \begin{bmatrix} -high \\ +back \end{bmatrix}$
11. $\begin{bmatrix} -high \\ +back \end{bmatrix} \rightarrow 〔-cons〕$
12. $〔-cons〕 \rightarrow \begin{bmatrix} +voc \\ -ant \\ -cor \\ +cont \\ +tense \end{bmatrix}$
13. $〔+voc〕 \rightarrow \begin{bmatrix} +voice \\ -nas \end{bmatrix}$
14. $\begin{bmatrix} -cons \\ \alpha ant \end{bmatrix} \rightarrow 〔-\alpha high〕$
15. $〔+high〕 \rightarrow 〔-low〕$
16. $〔+back〕 \rightarrow 〔-low〕$
17. $〔+strid〕 \rightarrow 〔-voice〕$
18. $〔-voice〕 \rightarrow \begin{bmatrix} -voc \\ -nas \end{bmatrix}$
19. $\begin{bmatrix} +ant \\ -cor \end{bmatrix} \rightarrow 〔-voc〕$
20. $\begin{bmatrix} -voc \\ \alpha voice \end{bmatrix} \rightarrow 〔-\alpha tense〕$
21. $〔+voice〕 \rightarrow 〔-strid〕$
22. $\begin{bmatrix} -voice \\ -cor \\ \alpha cont \end{bmatrix} \rightarrow 〔\alpha strid〕$
23. $\begin{bmatrix} +ant \\ -cont \end{bmatrix} \rightarrow 〔-strid〕$
24. $〔-voc〕 \rightarrow 〔+cons〕$
25. $\begin{bmatrix} +cons \\ -ant \\ +voice \\ \langle \alpha back \rangle \\ -nas \end{bmatrix} \rightarrow \begin{bmatrix} -cor \\ \langle -\alpha cont \rangle \end{bmatrix}$
26. $\begin{bmatrix} -voc \\ +ant \\ +voice \end{bmatrix} \rightarrow 〔-cont〕$

5) 語境界内でのどの位置でも排除される音連続がある。例えば子音の前ではy, ʌ, ɲ, ɕ, xは起らない。

$$[\quad] \rightarrow \left\{ \begin{array}{l} \{ +\text{voc} \} \\ \{ -\text{high} \} \\ \{ +\text{back} \} \\ \{ -\text{cont} \} \end{array} \right\} / \text{---C} \quad (1)$$

ñ は子音に後続しない。

$$[\quad] \rightarrow V / \text{---} \left[\begin{array}{l} +\text{nas} \\ -\text{ant} \end{array} \right] \quad (2)$$

ʌ の前に立つ子音はnのみである。

$$C \rightarrow \left[\begin{array}{l} +\text{nas} \\ +\text{cor} \end{array} \right] / \text{---} \left[\begin{array}{l} +\text{voc} \\ +\text{cons} \\ -\text{ant} \end{array} \right] \quad (3)$$

またθに後行する子音はp, b, t, d, k, g, m, n, lである。

$$C \rightarrow \left\{ \begin{array}{l} \left[\begin{array}{l} -\text{voc} \\ -\text{cont} \\ -\text{strid} \end{array} \right] \\ \left[\begin{array}{l} +\text{voc} \\ +\text{cont} \end{array} \right] \end{array} \right\} / \left[\begin{array}{l} -\text{voice} \\ +\text{cont} \\ -\text{strid} \end{array} \right] \text{---} \quad (4)$$

語中の子音の前では通常rが立ち、n, s, lの後の位置でのみRが起り、他の子音の後ではrが実現される。この関係は次の諸式で表わされる。

$$\left[\begin{array}{l} +\text{voc} \\ -\text{cont} \end{array} \right] \rightarrow \left\{ \begin{array}{l} \left[-\text{tense} \right] / \left\{ \begin{array}{l} \text{---C} \\ \left[\begin{array}{l} -\text{cont} \\ -\text{strid} \end{array} \right] \text{---} \\ -\text{nas} \end{array} \right\} \\ \left[+\text{tense} \right] / \left\{ \begin{array}{l} \left[\begin{array}{l} +\text{cor} \\ \left\{ +\text{nas} \right\} \\ +\text{strid} \end{array} \right] \\ \left[\begin{array}{l} +\text{voc} \\ +\text{cons} \end{array} \right] \end{array} \right\} \text{---} \end{array} \right\} \quad (5)$$

k又はgに続く子音はl, r, t, d, θ, s, m, nのいずれかである。

$$C \rightarrow \left[\begin{array}{c} +\text{ant} \\ \{ +\text{cor} \} \\ +\text{nas} \end{array} \right] / \left[\begin{array}{c} -\text{voc} \\ +\text{back} \end{array} \right] \quad (6)$$

t, d の後に許容される子音は m, n, b, k, x, l, r である。

$$C \rightarrow \left\{ \begin{array}{c} \left[\begin{array}{c} +\text{nas} \\ +\text{voc} \\ -\text{voc} \\ -\text{back} \\ -\text{voice} \end{array} \right] \\ \left[\begin{array}{c} +\text{ant} \\ -\text{cor} \\ +\text{voice} \end{array} \right] \end{array} \right\} / \left[\begin{array}{c} -\text{voc} \\ +\text{ant} \\ +\text{cor} \\ -\text{nas} \\ -\text{cont} \end{array} \right] \quad (7)$$

内部3連子音のそれぞれの位置についても制約がある。まず第1要素は b, m, n, l, r, θ, s, k⁷⁾ のいずれかであるから(1)の制限に加えて次の関係が満足されなければならない。

$$[+\text{cons}] \rightarrow \left\{ \begin{array}{c} \left[\begin{array}{c} +\text{ant} \\ -\text{cor} \\ +\text{voice} \end{array} \right] \\ \left[\begin{array}{c} +\text{ant} \\ +\text{cor} \end{array} \right] \end{array} \right\} / \quad \text{---CC} \quad (8)$$

$$\left[\begin{array}{c} +\text{cor} \\ -\text{cont} \end{array} \right] \rightarrow \left\{ \left[\begin{array}{c} +\text{voc} \\ +\text{nas} \end{array} \right] \right\} / \quad \text{---CC} \quad (9)$$

またそれに続く2子音は2頭子音群に見られる組合せと2子音群として許容されるs+子音を含む⁸⁾。

$$[+\text{cons}] \rightarrow \left[\begin{array}{c} +\text{ant} \\ +\text{cor} \\ +\text{strid} \end{array} \right] / C \text{---} [-\text{voc}] \quad (10)$$

$$[\quad] \rightarrow \left\{ \left[\begin{array}{c} -\text{voc} \\ -\text{cons} \end{array} \right] \right\} / C \text{---} C \quad (11)$$

$$[-\text{voc}] \rightarrow \left[\begin{array}{c} -\text{nas} \\ -\alpha < -\text{strid} > \\ \alpha < -\text{cor} > \end{array} \right] / C \left[\begin{array}{c} -\alpha < +\text{cor} > \end{array} \right] \left[\begin{array}{c} +\text{cons} \\ \alpha \text{cont} \end{array} \right] \quad (12)$$

意識的な注意深い発音では2番目にsを含む中間4子音連結が認められる(v.g. extranjero, abstracto, explicar, transplante, etc.)が通常第1子音を脱落させる傾向が強い。

従って内部であっても普通4個以上の子音連続は避けられる。3子音結合に隣接する segment, 2子音と単子音に挟まれた segment は非子音性(従って母音性)を余剩的に持つ。

$$[\quad] \rightarrow V/C_{3-n} \text{ --- } C_n \quad (13)$$

ただし $n=1, 2, 3$

母音 i と子音 y の分布は部分相補的であり、母音に先行する頭位置に現われるのは y で、子音後で y と i が対立するのは b, n, s の後である⁹⁾。

$$\begin{bmatrix} +\text{high} \\ -\text{back} \\ +\text{cont} \end{bmatrix} \rightarrow [+cons] / + \text{ --- } V \quad (14)$$

y の先行子音に対する制限は(4), (7)と併せて次の関係で示される。

$$[+cons] \rightarrow \left\{ \begin{bmatrix} -\text{voc} \\ +\text{ant} \\ +\text{cor} \end{bmatrix} \right\} / \text{ --- } \begin{bmatrix} -\text{voc} \\ -\text{back} \\ -\text{ant} \\ +\text{voice} \\ -\text{nas} \end{bmatrix} \quad (15)$$

母音相互間の連結には子音の場合に比べて制限は少ない。5母音以上が一語中に連続することはあり得ない¹⁰⁾

$$[\quad] \rightarrow [+cons] / V_{4-n} \text{ --- } V_n \quad (16)$$

ただし $n=1, 2, 3, 4$

更に語内部での隣接3母音又は4母音中の後の3母音の組合せはごく小数の単語, cuaima, guaina など gua- を含む数語, buey 及び動詞屈折に見られる -iai-, -iei-, -uai-, -uei- に限られている¹¹⁾。

$$V \rightarrow \left\{ \begin{bmatrix} +\text{high} \\ -\text{high} \\ \{ +\text{low} \} \\ -\text{back} \end{bmatrix} \right\} / \begin{matrix} V_0 \text{ --- } V_2^2 \\ V_1 \text{ --- } V_1^1 \\ V_2 \text{ --- } \end{matrix} \left\{ \begin{matrix} C \\ \# \end{matrix} \right\} \quad (17)$$

2母音連結には理論上25の結合様式が可能だが、実際は aa, ee,等同一母音が連続する例は稀である¹²⁾。特に uu, ii の連続は排除される。

$$V \rightarrow [-\alpha \text{ back}] / \text{---} \left[\begin{array}{c} +\text{high} \\ \alpha \text{ back} \end{array} \right] \quad (18)$$

(18)を含めてもし同一の母音の不連続を一般的な事実として認めるならば次の同時的条件として表わすと簡単である。

$$\left[\begin{array}{c} V \\ \alpha \text{ high} \\ \beta \text{ back} \\ \gamma \text{ low} \end{array} \right] \quad \left[\begin{array}{c} V \\ \delta \text{ high} \\ \epsilon \text{ back} \\ \zeta \text{ low} \end{array} \right] \quad \begin{array}{l} \alpha = \delta, \beta = \epsilon \text{ ならば } \gamma \neq \zeta \\ \beta = \epsilon, \gamma = \zeta \quad \text{ " } \quad \alpha \neq \delta \\ \alpha = \delta, \gamma = \zeta \quad \text{ " } \quad \beta \neq \epsilon \end{array} \quad (19)$$

上記の諸条件は先の segment 内余剰規則〔Ⅲ〕15, 16, 10で示された関係, $\alpha = +$ ならば $\gamma = -$; $\beta = -$ ならば $\gamma = -$; $\gamma = +$ ならば $\alpha = -$ で $\beta = +$ なる条件の充足を前提にしている。

6) 語頭位置¹³⁾は r を除く西語のどの segment も立つことができる。即ちこの位置では R の指定素性のうち [+tense] は余剰的であるから次の規則が得られる。

$$\left[\begin{array}{c} +\text{voc} \\ -\text{cont} \end{array} \right] \rightarrow [+tense] / + \text{---} \quad (20)$$

語頭が母音のとき後続の子音については制限がなく予測できない。しかし語頭2子音連結の可能な結合様式は fl, gl, bl, kl, pl, dr, tr, fr, gr, br, kr, pr の12種類に限られている。語の初めに子音が来れば次の segment は母音か流音でなければならないから、この位置を占めるのは必ず [+voc] である。

$$[\quad] \rightarrow [+voc] / \#C \text{---} \quad (21)$$

またこれらの流音に先行する子音そのものも限られていて l の場合 f, g, p, k, b で, r の前ではこの4子音に d, t が加わる。

$$[\quad] \rightarrow \left\{ \left[\begin{array}{c} -\text{voc} \\ -\text{cons} \end{array} \right] \right\} / \# \text{---} C \quad 14) \quad (22)$$

$$[-\text{voc}] \rightarrow \left[\begin{array}{c} -\text{nas} \\ -\alpha < -\text{strid} > \\ \alpha < -\text{cor} > \end{array} \right] / \# \left[\begin{array}{c} - \\ -\alpha < +\text{cor} > \end{array} \right] \left[\begin{array}{c} +\text{cons} \\ \alpha \text{cont} \end{array} \right] \quad (23)$$

西語は語頭3子音群を容認しないから、次の場合のように第1, 2, 3要素のいずれかに母音が来る。

$$[\quad] \rightarrow V / \# \left\{ \begin{array}{c} \text{---CC} \\ C \text{---} C \\ CC \text{---} \end{array} \right\} \quad (24)$$

頭子音 y, ʌ に後続するのは i 以外の母音である。

$$\left\{ \begin{array}{l} [-\text{back}] \rightarrow [-\text{high}] \\ [+ \text{high}] \rightarrow [+ \text{back}] \end{array} \right\} / \# \left\{ \begin{array}{l} + \text{high} \\ - \text{back} \\ + \text{cont} \end{array} \right\} \quad (25)$$

7) 語末に 2 個以上の子音連続は見られず、末尾に子音が立てばその直前の segment は $[-\text{cons}]$ であり、語末から 2 番目が子音であれば、最終 segment は母音である。

$$[\quad] \rightarrow V / \left\{ \begin{array}{l} \text{---} \text{C} \# \\ \text{C} \text{---} \# \end{array} \right\} \quad (26)$$

更に WB の直前に許容される子音の種類は n, l, r, s, θ に限られる¹⁵⁾。

$$\text{C} \rightarrow \left\{ \begin{array}{l} + \text{ant} \\ + \text{cor} \end{array} \right\} / \text{---} \# \quad (27)$$

$$[-\text{cont}] \rightarrow \left\{ \left\{ \begin{array}{l} + \text{voc} \\ - \text{tense} \\ + \text{nas} \end{array} \right\} \right\} / \text{---} \# \quad (28)$$

尚、形式素内部にも形式素境界 FB, 語境界 WB を越えても当てはまる関係は音形論の一般規則で扱われる。一般音形規則の中にはここで取り上げなかった種々の規則、例えば強勢配分、後続の子音による鼻音調音位置の同化, s, θ, 等の有声化, b—β, d—δ, g—r の分布, i の半母(子)音化などを規定する規則が含まれる筈である。

8) 発話の中で具体的に実現される物理的な言語音の世界は 2 種類の多様性をもつ。一つは個人の間の生得的あるいは同一個人の時差的な発声器官の不同性など、あらゆる言語外的な条件に左右される無限の多様性である。他の一つは比較的小数個の単位を用いて記述できると考えられる有限の多様性である。文法が音声表示として与えるのは後者であるが、それには規則的なものを個別的なものとが複雑にからみ合っている。規則性とはある条件が与えられれば必ず成立する一定の関係であり、規則によって予測できない、他に還元不可能なものが個別性である。

辞書項目の音的側面を構成する要素は、予測可能な余剰的情報を取り去った後に残るこのような個々別々な性質の総和になる。

個別言語体系を基礎にする予測可能性/個別性に代えて、言語一般に普遍的なものと特異的なものの区別を認めて前者を個々の文法から組織的に

独立させようとする考え方がある。そこで、辞書表示を十、一の値又は0（無情報）で表わさず“normality”の基準に基づいたり抽象的な別のレベル—marked/unmarked—を設けて、これを十か一に解釈する普遍的な規則を予想する Marked—Unmarked theory が提案されている¹⁶⁾。しかし、“自然度”の基準に対する客観性やその根拠にも問題があり、この考え方が音韻論に必要不可欠なのかどうかに関してなお検討の余地が多いように思われる。Marking convention を採用すれば、個別文法の余剰規則は殆ど不要になる反面、これまで見てきたような個別言語的音形許容可能性と許容不可能の差を明確に示し得ないことは明らかである。（1971年4月）

〔註〕

- 1) *SPE* p. 171
- 2) *SPE* Chapter Seven pp. 298~329
- 3) 各音の素性指定値に関しては未だ検討の余地が残されていると思う。問題となりそうな個所は例えば、s の [anterior], [high], 流音に対する [continuant], [tense] 等の解釈である。James W. Harris (1968) はいくつかの点で筆者と異なる指定を与えている。紙幅の都合で、この点に関する詳しい検討は別の機会にゆずることとしたい。
- 4) Postal (1968) の用語。音声行列と全く同じ1組の素性を持ちただ適当に十、一値を指定された音形 segment を指す (p. 70)。
- 5) “弁別的相違性”の定義は Chomsky (1965) に見られる。……two segments are *distinct* just in case one is positively specified with respect to a feature with respect to which the other is negatively specified, and more generally, that two matrices with the same number of columns are distinct if the *i*th segment of one is distinct in the sense from the *i*th segment of the other, for some *i*. (p. 81)
- 6) *SPE* p. 388
- 7) *actriz*, *pecblenda* に *ktr*, *kbl* の連続があるが例外と見るべきだろう。
- 8) *Csn*, *Csy*, *Csč*, *CsR* は実在せず欠けている。また *Csb*, *Csg* も稀にしか見られない。*v. g. transverso, transgangético, etc.*
- 9) 稀に *dy* も (*adyacente*) 現われる。*b, n, s, d* いずれの場合でも、*y* との間に *FB* の存在が予想されることから、これらの子音の後においても *i* と *y* の分布は *FB* の有無で条件づけられ、互に対立するものではないとみることもできる。もしそうだとすれば、基底 segment として *i* と *y* の区別を設けることが妥当かどうか問題になる。しかし本論では不確定要素の大きい形式素の形態を一応棚上げにし、〔表 I〕に *i, y* 両方を含めた。
- 10) 4 母音の連結も動詞屈折形に見られる (e. g. *oíais, huíais, etc.*) 以外は *coihue, huahua, chihuahua* など *americanismo* の例外に限られる。
- 11) *iau, uau, uao* を持つ語が少数あるが (e. g. *miau, guau, guao*) , 擬声語又は外来

語である。

- 12) azahar, moho, vehemente ; leer, ceer, crear 等の動詞形にoo, eeが起こる。
- 13) [-seg, -FB, +WB] の直後の位置。ただし規則 (20) は形式素の第1要素つまり [-seg, +FB] に続く segment に対してもあてはまる。
- 14) 一般にC, V はそれぞれ $\left\{ \begin{matrix} +\text{cons} \\ -\text{voc} \end{matrix} \right\}$, $\left[\begin{matrix} +\text{voc} \\ -\text{cons} \end{matrix} \right]$ の略号であるが, 西語の場合 [-cons] $\rightarrow$ [+voc] が余剩的 (III, 12) であるから V = [-cons] と考えてよい。
- 15) 正字法上 -dで終る語は多いが実際ほとんど [d] とは発音されないから, 考慮外に置かれている。reloj, boj, herraj. などごく少数の語に発見される語末 [x] も不安定で例外と考える。[k, t] で終る語は少数の借用語 (多くは仏語系) 中にあるが, 西語化した発音では末尾子音は無音化することが多い。v. g. frac, coñac, complot, cabaret.
- 16) P. M. Postal (1968) pp. 165~198 ; *SPE* Chapter Nine.

参考文献

- Amancio Bolaño e Isla : Breve Manual de Fonética Elemental, México, D. F., 1968
- J. Donald Bowen & Robert P. Stockwell : The phonemic interpretation of semivowels in Spanish, *Language* 31, pp. 236~240
- J. Donald Bowen & Robert P. Stockwell : A further note on Spanish semivowel, *Language* 32, pp. 290~292
- Noam Chomsky : Current Issues in Linguistic Theory (1962), In *The Structure of Language*, ed. Fodor/Katz, pp. 50~118
- Noam Chomsky : Aspects of the Theory of Syntax, Cambridge Mass., 1965
- Noam Chomsky & Morris Halle : The Sound Pattern of English, New York, 1968
- John B. Dalbor : Spanish Pronunciation, Theory and Practice, Chicago, 1969
- Pierre Delattre & Carroll Olsen : Syllabic features and phonic impression in English, German, French and Spanish, *Lingua* 22, pp. 160~175
- Jerry A. Fordor & Jerrold J. Katz : The Structure of Language, Readings in the Philosophy of Language, Englewood Cliffs N. J., 1964
- Samuel Gili Gaya : Elementos de fonética general, Madrid, 1966
- Morris Halle : On the Bases of Phonology (1958) , In *The Structure of Language*, ed. Fodor/Katz, pp. 324~333
- Morris Halle : Phonology in Generative Grammar, *Word* 18, (1962) , pp. 54~72
- Robert T. Harms : Introduction to Phonological Theory, Englewood Cliffs, N. J., 1968
- James W. Harris : Spanish phonology, Cambridge Mass., 1969
- F. W. Householder : On some recent claims in phonological theory, *Journal of Linguistics* 1, pp. 13~34
- Larry M. Hyman : How concrete is phonology?, *Language* 46, pp. 58~76
- Roman Jakobson & Morris Halle : Fundamentos del lenguaje, Trad. de Fundamentals

- of Language, Madrid, 1967
- Roman Jakobson, C. Junnar M. Fant & Morris Halle : Preliminaries to Speech Analysis, The Distinctive Features & their Correlates, Acoustics Laboratory Technical Report No. 13, 1955
- David A. Jones : Phonemics and generative phonology, In *Papers from the Fifth Regional Meeting of the Chicago Linguistic Society*, 1969 ed. Robert I. Binnick et al.
- Martin Joos : Readings in Linguistics I. Chicago, 1967
- Ronald W. Langacker : Review of Robert P. Stockwell et al. "The Sounds of English and Spanish", *Foundations of Language* 4 pp. 211~218
- Emilio Alarcos Llorach : Algunas cuestiones fonológicas del español de hoy, *Presente y futuro de la española II.*, Madrid, 1964
- Emilio Alarcos Llorach : Fonología española, Madrid, 1965
- John W. Martin : Distinctive-feature System of English and Spanish, Supplement to R. P. Stockwell & J. D. Bowen : *The Sounds of English and Spanish*
- Tomás Navarro : Manual de Pronunciación Española, New York, 1967
- Tomás Navarro : Studies in Spanish Phonology, Coral Gable Fla., 1968
- Rebecca Posner : Review of Robert P. Stockwell et al. : "The Sounds of English and Spanish, *Journal of Linguistics* 4 pp. 141~142
- Paul M. Postal : Aspects of Phonological Theory. New York, 1968
- Bernard Pottier : Phonétique et phonologie espagnoles, Paris, 1965
- Antonio Quilis & Joseph A. Fernández : Curso de Fonética y Fonología españolas, Madrid, 1969
- Bohdan Saciuk : Some basic rules of Portuguese phonology, *Studies presented to R.B. Lees by his students*, ed. M. Sadock & A. Z. Vanek, 1970
- Sol Saporta : A note on Spanish semivowels, *Language* 32, pp. 287~290
- Richard Stanley : Redundancy rules in phonology, *Language* 43, pp. 393~436
- Robert P. Stockwell & J. Donald Bowen : The Sounds of English and Spanish, Chicago, 1965
- Robert D. Wilson : A criticism of distinctive features, *Journal of Linguistics* 2. pp. 195~206

P. S.

この原稿が印刷に廻わされて後、1971年12月に Robert J. Di Pietro : *Language Structures in Contrast*, First Printing : August 1971 (Newbury House Publishers) を入手した。同書第7章 Phonological Component の中に、Di Pietro は筆者が本稿で使用したものとほぼ同じ素性による、Redundant matrix of Spanish segments 及び Non-redundant matrix for Spanish sound (pp. 144~145) の表を掲げていることを付記しておく。(1972年6月)